

エッセイ '97

待ち遠しい春

日本文藝家協会編

編纂委員 高田宏 津島佑子
三浦哲郎 三木卓 前川康男



日本文藝家協会編

編纂委員

高田宏

津島佑子

三浦哲郎

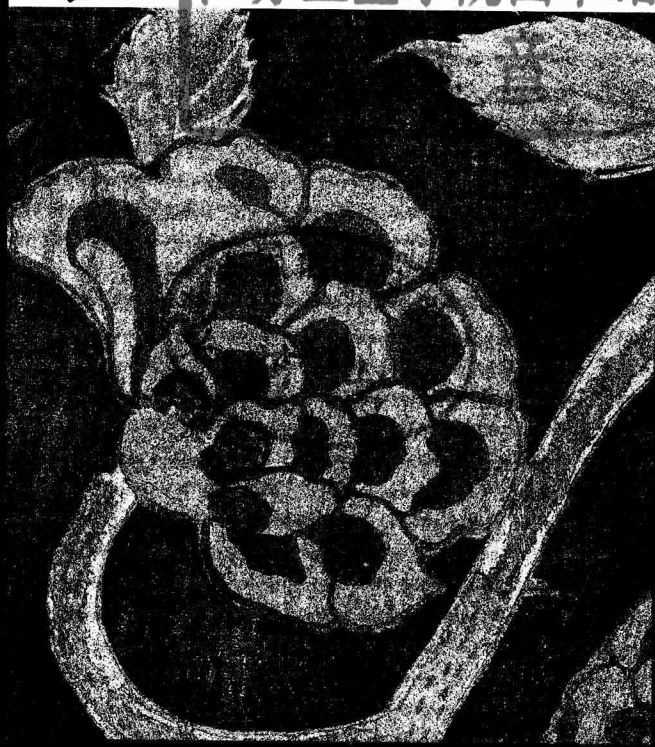
豆本卓

前川康男

江苏工业学院图书馆

エッセイ '97

ち遠しい春



待ち遠しい春

一九九七年七月一〇日 第一刷発行

編者——日本文藝家協会

発行者——星野 巖

発行所——光村図書出版株式会社

東京都品川区上大崎二一九九 郵便番号一四一
電話——〇三三四九三二二一一（代）

印刷所——株式会社加藤文明社

製本所——和田製本工業株式会社

価格はカバー・帯に表示してあります。

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は小社出版部宛お送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

エッセイ 97

待ち遠しい春



目次

手蹟が似てくる

竹西寛子 10

哀悼と祝福

柳 美里 14

郵便局が遊び場だった

清水哲男 19

母者びとの言葉

出久根達郎 24

老いとコンピューター

水上 勉 29

演歌と別れそして心歌へ

石坂まさを 33

現代美術も勝てへんな

横尾忠則 37

バロンのこと

團伊玖磨 41

蛇や墓や

川上弘美 45

幻の式辞

大河内昭爾 50

車中ガン談

五木寛之 55

まる

小檜山博 59

耳学問、句読点、朗読

大岡 信 62

彼と私

辻 章 67

書くための時間

小池真理子 72

乙姫さまの館——佐藤春夫先生のこと

尾崎秀樹 77

雲を追ひ

大庭みな子 82

「日本人向き」はやめたい

石丸 寛 86

野に寺を建てる

立松和平 92

セクハラパンツ

二宮清純 97

井伏さんの『徴用中のこと』

庄野潤三 101

徳用マツチ

池内 紀 104

亡友澁澤龍彦の手紙

出口裕弘 107

寝そびれる

黒井千次 110

戦中哄笑

丸谷才一

116

ニューヨークトイレ事情

河野多恵子

121

詩の話

辻征夫

125

ことばの力

外山滋比古

129

本とのつきあい

阿刀田高

133

志の文学

秋山駿

137

司馬さんと吉行さん

大村彦次郎

142

雲の行方

日野啓三

145

丹塗りの赤い格子戸

久世光彦

149

秋愁憂

大原富枝

154

待ち遠しい春

三木卓

158

薬師寺再訪

川村二郎

162

昆明の雨

三浦哲郎

166

受け身ということ

青野 聰

169

女の死に方

佐藤愛子

173

軍歌考——「雪の進軍」について

阿川弘之

177

ふたりはいつも古書店で

佐々木譲

181

昼の夢

高樹のぶ子

186

男がタカラヅカを見れば

阪田寛夫

191

聖夜の満月

小川国夫

198

追分での昨今

堀多恵子

201

豚の底力

又吉栄喜

205

イロクォイ音楽の伝承者

土取利行

209

ものいわぬ街

安岡章太郎

214

石松の倫理	池澤夏樹	218
日本語を書く部屋	リービ英雄	223
吉行家のヒジキ	久米 勲	228
おおきいなめくじ	木地雅映子	232
紙縊	中野孝次	237
自然のささやき	司 修	241
黒潮の海明り	神坂次郎	245
飯盒と絵筆	窪島誠一郎	249
旨くないワインとパスタの有難味	村松友視	254
関西人の真骨頂	藤本統紀子	258
床屋の心境	石 和 鷹	261
溺体始末記	吉本隆明	267

富士山麓再訪

津島佑子
271

親の趣味

古井由吉
277

手づくりカラオケ

山川静夫
283

ものは言いよう

平岩弓枝
285

荒崎にて

田久保英夫
289

手足の冷えの問題

赤瀬川原平
293

満たされない思ひについて

岡井隆
297

美しい天才たち

高田宏
301

装帧
||
公司
修

エッセイ 97

待ち遠しい春

手蹟が似てくる

竹西寛子

去年いただいた手紙の中に、どうしても見つけ出さなければならぬものがあって、葉書の束をくずしていた。

用済みになった事務的なものの処理はいうまでもないが、私信をみな保存しているわけではない。保存を当然と思ったものの以外でも、即座の処置をためらったものは取り置き、時を隔てて読み返す折の自然に委せている。

保存を当然と思っていた私信が、一年後にはごく自然に処理の対象になっていたり、時が経てば手放すだろうと思っても、そうはならなくなる場合もある。

ひとつ書面に対する時によっての反応の違いを考えてゆくと、自分の揺れを見せつけられるが、たまには、反応の違う自分になれてよかったと思う時もなくてはならない。

葉書の束をくずしている途中で、なつかしい文字に立ちどまった。癖というほどではないけ

れど、筆法と筆勢に独自のものがあって、宛名の手蹟だけですぐにその人と知られた。ご自分の住所やお名前は本文に続いていたらしく、表は宛名しか書かれていない。

しかし、次の瞬間、はっとなった。

去年、この方からの葉書を受け取るはずはないのである。なぜなら、その前の年に病気が癒えぬまま亡くなっていられたのだから。肌がそよめく感じだった。

恐る恐る葉書を裏返した。それは、未亡人からの手紙であった。何とまあよく似ている文字。どちらがどちらに近づかれたのか、双方の歩み寄りの結果なのか、それは知りようもない。いずれにしても私が存じ上げてからの故人の手蹟と、未亡人のそれとがあまりにもよく似ているのに深く驚き、改めてお二人の間柄を思った。

仲の好い夫婦の文字が似る、とは、小さい頃から周りの老人達に聞かされていたことである。この葉書をその例と見てよいのかどうか、少なくとも私には、その例ではないと言える根拠はなくて、夫妻を知る人達の多くが、妻に服従を余儀なくさせる夫への非難と羨望を繰り返しても、夫人の側には、第三者には理解し難い得心があって、きわどい均衡は、お互いの知性によって保たれているらしいというのが私の怠惰な観察であった。

けれども、これほどまでの接近とは気がつかなかった。確かに食い入るように見詰めれば、筆法と筆勢の癖らしきものには微妙な違いを見出すこともできる。しかし咄嗟には、まずは同

筆と見るのもやむを得まいと言ひ訳をした。もしもお二人が結婚される前の手蹟を見ることができれば、影響のさまはよく分るかもしれないが、私にはそれを確かめたい気持は全くない。

実例に沢山あたっているわけではないので断定はできない。ただ、一見仲の好きそうなご夫婦でも、同じようなない手蹟の示される例は少なくないし、仲の好くないご夫婦で文字が似ているという例も又ほとんど知らないのである。

こんなこともあった。

まだ出版社に勤めていた頃、一枚の絵葉書が届いた。宛名の下に横線が引かれ、文章はその下に書かれている。宛名と本文の手蹟に見覚えがあつて、すぐにある作家からのものと思つた。自分の机についてゆつくりと読み始めた。すると、どうも文面がおかしいのである。上段の差出人の住所と名前は小さく書かれている上に、局印が二つも捺されていて、大層読み難くなっている。しかし判読しなければならぬ。

分つた。

私が差出人だと思つた方からの葉書ではなく、私には初めての別の作家からの手紙であつた。たとえばときの間のことにもせよ、差出人を勘違いした恥ずかしさは尾を曳いた。

それにしても又言ひ訳めいてくるが、文字が本当によく似ている。こういうこともあるのかとつくづく見入つた。どちらがどちらにと問わずとも、二人の作家の資質に通う部分があるの

を認めている読者としてみれば、意外な事実ではない。双方の往き来も知る人には知られている。類似の原因は案外単純かもしれないし、逆にこみ入っているかもしれないけれど、要するに私が一方の手蹟しか知らなかったための勘違いであった。

折々の、人そのもののあらわれとしての言葉遣い同様、手蹟にも気味の悪い一面がある。無意識のうちに他人の手蹟に変化を促していたり、他人からの影響でそちらに近づいていたたりする。

老年期に、幼少期の文字そのままで生きている人もまず考えられないが、意識して、あるいは無意識のうちに手蹟を変えながら生きていく人間への興味は尽きない。一人の書の師についた弟子達が、ある時期一様に師の書の近くにいても、習熟するにつれて各々の書を見出していく。この、学びの後に自然に師離れを促していく書の力も又関心の対象である。

弱いから影響される、強いから影響を与える、そういう見方の次元を超えて、手蹟とはまことの生きものだと思わざるを得ない。手蹟の変化に、折々の内面の変化を示し続ける人間の測り難さを思うと、文字、言葉への愛着とひとつになった人間への愛着が新たになる。限らない測り難さのおかげで、今日もこうして生きていられる有難さを思う。

たけにし・ひろこ（作家）『中央公論』十月号

哀悼と祝福

柳 美里

観ていないのだが、『お日柄もよくご愁傷さま』という変わったタイトルの映画があった。確か、一日のうちに結婚式と葬式を行うはめになった家族の物語だったと思う。

先日葬式ではないが、昼は去年亡くなられた高校の恩師であるへ木田博彦先生をしのぶ会、夜は友人の結婚式の二次会に出席しなければならなかった。まず着て行く服に困った。へしのぶ会には明るい柄物は駄目だろうし、パーティーには多少は華やかな服を着て行くのが礼儀というものだ。迷いに迷った挙句、ベージュのワンピースに決めて、横浜の教会に向かった。木田先生は 크리스チャン だった。

教会に着き、先生の奥さんとお兄さんに挨拶をすると、礼拝堂の一番前の席に案内された。壇上の前に白い布がかかった机があり、遺影の前には先生が好きだった、紫つゆくさ、赤まんま、猫じゃらしなどの野草が供えられていた。木田先生は化学を教えていた。担任だったこと